常議員会議長の「お役目」

常議員会 議長　志賀 剛一（41 期）

今年度は、通算４回目の常議員を議長の立場で経験している。

承知のとおり、常議員会は総会に次ぐ意思決定機関であり、入退会審査や規則の制定・改廃、予算・決算、総会付議事項などを始めとする様々な議題が上程され、審議される。

第１回常議員会の冒頭あいさつで、議長として議事進行の「公正」さは重視するが、「迅速性」にはあまりこだわらず、多くの常議員から様々な質問や意見が出るような健全な会議体としての場の提供を目指す旨の所信を述べた。本稿を書いている時点で、賛成・反対が拮抗するような議案には接していないものの、毎回、活発な議論が重ねられており、議長として一応の役目を果たせていると自負している。なお、今年度から常議員会へのオンライン出席制度がさらに拡充され、壇上のモニターに複数のWeb出席者が表示されていることがあるが、海老原副議長が挙手や賛否を常に確認してくださっており、私は安心して議事に専念できている。

ところで、常議員会議長には重要な「お役目」があと２つある。１つ目は総会における常議員会の審議経過報告である。前述のとおり、常議員会は総会に次ぐ意思決定機関であり、選挙で選ばれた常議員によってどのような審議がなされたかは総会出席者にとって重要な関心事である。とりわけ、多数の質問や意見が出た議案については、なるべくていねいに報告するよう心掛けている。

２つ目は東弁大運動会において最後に万歳三唱をする「お役目」である。これは台の上で万歳を三唱するだけなので、この程度の言及にとどめておこうと思う。

副議長席に座ってみて

常議員会 副議長　海老原 信彦（44 期）

副議長は、議長の開会宣言の後、出席者数の報告を行う。午後１時の開会時には50数名で、今日は出席者が少ないかと思っていると、その直後に出席者は続々増え、結果として毎回70数名が出席している。常議員数は80名だから、９割以上の出席率である。

副議長は、出席者数を報告し、議事録署名者を指名すると、後は殆ど発言することはない。志賀議長の議事進行が安定しているので、その後は会場とオンラインの画面を眺めていることになる。

会場を見渡していると、出席者の様子がよくわかる。出席者は皆ノートパソコンを持ち込んで議案資料を眺めているが、壇上から見る限り、皆さん事前に資料を読み込んで会議に臨んでいることが見て取れる。常議員会は毎回配布される資料が多く、内容を理解するのもなかなか大変である。若い常議員にとっては、問題の所在が十分につかめないこともあると思われる。そういうとき、常議員を何回か経験された方や役員経験者が質問や意見を述べていただくことは、議長団にとっても大変ありがたい。会議が活性化するし、問題の所在が理解しやすくなる。

副議長は、毎回の常議員会の前に開かれる正副議長会議にも参加する。そこでは、当日審議される議案や報告事項について担当役員から説明がある。担当役員は、担当する委員会や日弁連、関弁連の議論状況をふまえて、常議員会の場での質問を想定して準備をされている。常議員会の正副議長会議は、役員の方達の苦労と当会の現状を知ることのできる貴重な機会であると共に、我々の活動が事務局の周到な準備という支えのもとに成り立っている実情も感じる場であった。

年度末の時期に入り、大きな案件の審議も増えると思われるが、今年度の常議員の皆さんと共に、元気で任期を全うしたいものと思っている。